

名大の時間

コロナ禍で始まった大学生活

の中、何とか受験を終え、この名寄市立大学の学生として名寄市にくることができた。私の地元が茨城県ということもあり、名寄市の気候はかなり肌寒く感じ、これからの冬をどうしのげばよいか、少し不安に感じた。だが、一方で未体験の冬を体感できるという興味が湧いた。

こういった茨城県にはなかった気候の

変化を味わいつつ、大学生として初の行事である入学式が始まった。高校の時の入学式と違い、周りの同級生たちから大人びた雰囲気を感じ、久しぶりに緊張した。

入学式の会場に入ると、コロナ対策も相まって、かなり人数が制限された中の入学式だった。通常であれば、保護者や来賓の方々がいら

っしゃる中での厳粛かつ、盛大な入学式であったのだろう。

万全な状態での入学式に参加できなかったことを大変残念に思う。また、その後の授業などもコロナ対策のため、遠隔授業が基本となり、私

が思い描いていた大学生生活とは少し違ったスタートとなった。

コロナ対策だとわかっていても、やは

り友達と学内で話したり、勉強を共にしたりなど、もっと人との関わりを増やしたいと思ってしまう。しかし、このように感じている学生は自分以外にも大勢いるだろう。

客観的に私を取り巻く環境を考えてみると、コロナ禍において、恵まれた環境に今いることに気づいた。コロナ対策がある中でも、入学式を行うことができ、一部の授業であるが

対面授業も実施することができているの



だ。もちろん、このような環境があるのは先生方や事務の方々がいらっしやるおかげである。

このような恵まれた環境がある名寄市

立大学で、どのように今後の将来に繋がる経験ができるかどうかは私自身にかかってい

る。そのため、今の環境を作って下さっている方々に感謝を忘れずに、大学生活を有意義なものにしていきたい。

社会福祉学科1年 大槻晃佑

コロナ禍で医療や経済が逼迫した状態